

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520390

研究課題名(和文) 西洋古典文学における「ジャンル混交論」を基軸とした実証的作品論研究

研究課題名(英文) Studies on the Classical Literary Works based on the theory of 'mixture of genres'

研究代表者

大芝 芳弘 (Oshiba, Yoshihiro)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：70185247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：西洋古典文学研究においては、各文芸ジャンルの伝統と革新の問題の解明がその最重要課題の一つであるが、文学的伝統を受け継ぎつつそこに新たな創造的革新の手を加える方法の一つに、特定のジャンルの作品でありながら異なるジャンルの要素を取り込むことで作品に新たな豊かさをもたらす「ジャンル混交」と呼ぶべき方法がある。本研究ではこの観点から古代ギリシア・ローマの古典文学作品を実証的に究明することで、各々の作品の持つ独創性と、その基盤となるジャンルの伝統とその変容の様相を明らかにすることを目指した。研究代表者と分担者は各自の選択した作品に関してこの面から研究を遂行し、一定の成果を挙げる事ができた。

研究成果の概要(英文)：Our Research-project aimed at investigating various works of Greek and Latin literature from the viewpoint of literary tradition and innovation with the help of the theory of 'mixture of genres,' which is recently hotly debated among European and American scholars of ancient literature. In this theory, a work of a certain genre may sometimes make use of some elements of another genre or other genres, thus making its own text new and innovative in its own generic tradition. We tried to elucidate how such 'generic interaction' functions in various works to make them innovative (or, in other words, enriched by generic fertilization) by investigating as carefully as possible not only their formal or stylistic features but also their thematic characteristics. Through these investigations and critical analyses on individual works of various genres, we could confirm even more clearly that such generic mixture and interaction is a key to the creativity of each individual work.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：西洋古典学 ジャンル混交 ジャンル 伝統 革新 文体

1. 研究開始当初の背景

本研究組織を構成する両名の研究者、研究代表者の大芝芳弘と研究分担者の小池登は、大芝が東京大学の非常勤講師として、小池が首都大学東京の非常勤講師としてそれぞれ出講するなど、西洋古典学研究者としてともに共通の関心と研究手法を持ち、相互の大学の研究と教育を互いに担い合う仲間として連携して来た。そのため、大芝が首都大学東京において科学研究費補助金による研究として継続して遂行して来た一連の研究課題の研究分担者として小池を迎え、さらに幸いにも 2013 年度からは首都大学東京における同僚として迎えることもできたのは、研究遂行上も大きなプラスとなった。さらに、大芝の以前の同僚であった国際基督教大学の佐野好則、東京大学の日向太郎の両氏にも連携研究者として参加して頂いた。上述の一連の研究とは、基本的に西洋古典文学における伝統と革新、模倣と独創の問題を主たる関心として行われて来た研究であった。即ち、西洋古典文学作品をその形式と内容の両面にわたる様々な角度から実証的に検討・考察することにより、西洋古典文学における伝統の根強さと、それと同時に、作者がその伝統に対して多様な工夫を凝らして新たな作品を作り出して行く革新性と創造性の機微を捉えることに努めて来た。この問題は同時に欧米における古典文学研究においても盛んに議論され研究が積み重ねられて来ている課題であり、我が国においても同様の研究が進められて来た。都立大学の時代から首都大学東京になって以降も大芝が中心となって継続的に遂行して来た科研費の研究課題としては、「西洋古典文学における叙事文芸様式の伝統と変貌」(基盤研究C(2)、平成 7-8 (1995-1996) 年度)、「ギリシア・ローマ文学における叙述技法の解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究C(2)、平成 10-12 (1998-2000) 年度)、「西洋古典文学の諸文芸様式における文体論的特徴の解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究C(2)、平成 13-15 (2001-2003) 年度)、「西洋古典文学における間テキスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」(基盤研究(C)、平成 17-19 (2005-2007) 年度)、「西洋古典文学における「創造的模倣」の実証的解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究(C)、平成 20-22 (2008-2010) 年度)などがある。本研究はこれら一連の研究の成果の上に立ち、さらに近年の欧米における研究動向においてもいっそう注目されて来たジャンル論的な観点を加味した視点から、上述のような西洋古典文学における伝統と革新の問題を、伝統的なジャンルの区分とそれを越えた「ジャンルの混交」による伝統の豊穡化という創造的な営みに特に焦点を当てて、それを具体的な作品に即して実証的に解明しようと企図したものである。

2. 研究の目的

西洋古典文学研究においては、各文芸ジャンルの伝統と革新の問題の解明がその最重要課題の一つだと言っても過言ではない。文学的伝統を受け継ぎつつ同時にそこに新たな創造的革新の手を加える方法の一つに、特定のジャンルの作品でありながら異なるジャンルの要素を取り込むことで作品に新たな豊かさをもたらす「ジャンル混交」と呼ぶべき方法がある。本研究はこの観点から古代ギリシア・ローマの古典文学作品を実証的に究明することで、各々の作品の持つ独創性と、その基盤となるジャンルの伝統とその変容の様相を明らかにすることを目指した。

西洋古典文学とりわけ韻文作品においては、それぞれのジャンル(genre: 文芸様式)ごとの規範ないし約束事を受け継ぎつつ同時に新たな作品を創造するという営み、即ち、ジャンルの伝統と革新が様々な次元において観察される。ジャンルの規範とは、韻文作品の場合、第一義的にはジャンルごとに特定の韻律を用いて詩を作ることであり、さらには措辞・語法、作品の規模と構成などの形式的・文体的要素と、作品の主題やモチーフ、調子や語り方(三人称の物語叙述か一人称の語りか演劇のような対話かなど)といった内容的・題材的要素の点での同一性を守ることである。新たな作品の創造とその受容に際しては、その伝統的規範の拡張やそこから逸脱による新生面の開拓と受取手によるその容認・評価が期待される。つまり、同一ジャンルの作品であっても、何らか新たな要素が加わることで独創的な作品が生まれることを作者も目指し受取手も歓迎するのである。それによって、当該ジャンル自体の伝統もまた個別の独創的作品によって少しずつ変容し豊かさを獲得することにもなる。これをまさにジャンルの伝統と革新と呼ぶとすれば、その営みを押し進める重要な方法として、特定のジャンルの作品でありながら当該ジャンルの規範を墨守するのではなく、異なるジャンルに属する要素、従って当該ジャンルにとっては新しい要素を部分的に取り込むことで新たな作品を作るという手法がある。こうして異なるジャンルの要素が混交することによって作品としての豊かさが生まれる。この現象を「ジャンル混交」と呼び、その手法に着目した文学理論を「ジャンル混交論」と呼ぶ。本研究においてはギリシア・ローマ文学全般を対象に、この現象を基軸に据えて個別の作品におけるその具体的な現れの様相を実証的に観察することにより、各々の作品自体の独創性と当該ジャンルにおける伝統の中での位置づけやジャンル自体の変容の様相を把握することを目指した。

3. 研究の方法

全体的な計画としては、まず本研究に関連する先行諸研究の調査と、現代の文芸理論とりわけジャンル理論とジャンル混交論の概観を行い、続いて措辞・語法、修辞技法や文体論的特徴、また作品の主題やモチーフ、トポス等、各ジャンルの特徴と一般的性格に関して概観する。次に検討対象とすべきテキストの選定とそれに関する文献学的基礎作業を行う。テキスト選定の後には実際の検討作業に入り、当該作品のテキストに即して「ジャンル混交」の様相を明らかにするために、当該作品が属するジャンルとは異質なジャンルの要素がその作品全体の中でいかに効果的に機能しているかに特に着目しつつ、内容と表現形式上の多様な観点からの比較検討を綿密に行う。その上で、当該ジャンルの伝統の中でのその作品の位置づけとそのジャンルの変容の様相にも考察を進める。この作業は原則として研究代表者と分担者および連携研究者が各々単独で行い、随時相互の研究の成果を報告しあい、批評と討議を経て最終的には論文にまとめて公表することとした。

具体的には、まずは本研究に関連する先行諸研究の調査と概観を行い、伝統と革新の様相が最も顕著に現れる措辞・語法（言語使用域 register の問題を含む）、修辞技法と文体論的諸特徴や主題、モチーフ、トポス等についても先行研究の成果に基づき、ギリシア・ローマ文学の各種文芸ジャンルとの関連に着目しつつ概観した。次いで「ジャンル混交」の実例として検討すべき作品の選定を行った。対象とすべき作品が確定した後は、まずは当該テキストに関する文献学的基礎作業として写本伝承および原典校訂上の諸問題についても先行研究を参照しながら確認した。次に、当該テキストに関する可能な限り綿密・着実な読解を行い、多様な観点からの観察と分析を進め、当該テキストと関連する類似箇所、並行例、そしてまさにジャンル混交の事例に該当すると考えられる作品や部分が見出された場合、それらの関連箇所についても同様の読解作業を進めた。その際には、単に部分的関連の確認に留まらず、関連箇所を含む作品全体との比較検討を行うことで、当該作品が異なるジャンルの作品からどのような要素を模倣し、また当該ジャンルの伝統とは異なる新たな工夫をどのように凝らしているかを作品全体との関連において考察した。具体的な検討の対象としたのは、小池がピンダロスの祝勝歌とギリシア悲劇、キケローとリーウィウスの散文、大芝がホラーティウス『エポーディ』とプラトンの『ポリーティアー（国家）』、またプロペル

ティウスの恋愛詩、キケローの哲学的散文とウェルギリウスの『アエネーイス』などであった。

4. 研究成果

上述のような研究目的のもと、「ジャンル混交」という現象を捉えるのに適した作品を選定した上で、具体的なテキストに即して実証的な究明に心がけた。その具体的な研究手順としては、当該テキストが異質なジャンルの要素のうち、措辞・語法、修辞技法など文体論的な要素や、モチーフ、トポス、構成など内容的な要素のいずれを取り込み自らの作品に活かしているか、単に部分的な比較ではなく、作品全体の中に関連箇所を位置づけつつ観察し、分析・検討する、というものである。こうしたテキストの読解と分析・考察の作業を、韻文作品と散文作品とを問わず、古典文学における主要な文芸ジャンルの内から選定した複数の作品に関して積み重ねることにより、作品ごとの特色だけでなくあるジャンルの伝統とその変容として考察することを試みた。特に力を注いだのは、小池はアイスキュロスを中心とするギリシア悲劇とキケローやリーウィウスの散文、大芝も引き続きホラーティウスの初期作品『エポーディ』とウェルギリウスの『アエネーイス』、またプラトンの『ポリーティアー（国家）』とキケローの哲学的散文、そして恋愛エレゲイア詩人プロペルティウスであった。大芝はその成果の一部を台湾大学における国際シンポジウムでの招待研究報告の形で公表する機会を得た。さらに、年度末には最終的成果として、所属大学の紀要に論文として公表することもできた。最後に、3年間の研究全体の総括を行い、次の課題に向けての方向性を確認し、新たな課題に基づく更なる研究の継続を図ることとした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計12件)

1. 大芝芳弘「ホラーティウス『エポーディ』における自由 「呪縛と解放」の観点から」『人文学報』489(2014), 1-38. 査読なし。
2. 日向太郎「キュンティアの亡霊 プロペルティウス第4巻第7歌」『西洋古典学研究』62(2014), 66-77. 査読なし。
3. 小池登（書評）：A. F. Garvie, ed., *Aeschylus, Persae*, Oxford UP 2009, 『西洋古典学研究』62(2014), 105-8. 査読なし。
4. 日向太郎（書評）：M. Venier, *Platonis Gorgias Leonardo Aretino interprete*, Firenze 2011, 『西洋古典学研究』62(2014), 111-3. 査読なし。
5. 日向太郎「プロペルティウスとホメロス」

- 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』45 (2014), 125-40. 査読なし。
6. 佐野好則 (書評) : Noriko Yasumura, *Challenges to the Power of Zeus in Early Greek Poetry*, Bristol CP 2011, 『西洋古典学研究』61 (2013), 125-7. 査読なし。
7. 日向太郎 (書評) : S. J. Heyworth, ed. *Sexti Properti Elegi*, Oxford 2007; id., *Cynthia, A Companion to the Text of Propertius*, Oxford 2007, 『西洋古典学研究』61 (2013), 133-6. 査読なし。
8. 日向太郎「帰ってきたキュンティア—プロペルティウス第4巻第8歌」『言語・情報・テキスト』20 (2013), 13-26. 査読なし。
9. Yoshinori SANO, 'the Background of Plato's Definition of Justice in *Republic 4*,' "International Plato Studies: Dialogues on Plato's *Politeia (Republic)*" 31 (2013), 361-5. 査読あり。
10. 大芝芳弘「Horatius, *Epod. 11*」『フィロロギカ』7 (2012), 1-22. 査読あり。
11. 佐野好則 (書評) : M. L. West, *The Making of the Iliad: Disquisition and Analytical Commentary*, Oxford UP 2011, 『西洋古典学研究』60 (2012), 123-5. 査読なし。
12. 日向太郎「シビュッラとアエネアス オウイディウス『変身物語』第14巻120-153についての一考察」『言語・情報・テキスト』18 (2011), 1-14. 査読なし。

〔学会発表〕(計7件)

1. 大芝芳弘「ルクレティウスの序(DRN 1.1-145)について」プラトン科学研究発表会「ギリシアの哲学と文学」2014(平成26)年3月28日(金)九州大学伊都キャンパス比較社会文化研究院研究室
2. Yoshihiro OSHIBA, 'Some Remarks on 'Creative Imitation' in Latin Literature,' "Fourth International Symposium on European Languages in East Asia: The Role of Art, Music and Literature in European Studies — A Critical Discourse in Cross Cultural Communication"; (Organizer : Division of European Languages, Department of Foreign Languages and Literatures, National Taiwan University, Taiwan (the Republic of China); 2013/11/15-16).
3. 日向太郎「キュンティアの亡霊—プロペルティウス第4巻第7歌」、日本西洋古典学会第64回大会(於東京都目黒区東京大学教養学、2013.6.2)
4. Yoshinori SANO, 'the Frist Stasimon of Sophocles's *Antigone*: comparison with texts on cultural progress,' "Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition" 6-7 August 2012, Seminar Room (1F), Classics Centre, 66 St. Giles, Oxford OX1 3LU, England. (Jointly sponsored by Corpus Christi College Centre for the Study of Greek

and Roman Antiquity and JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research Project: Comprehensive Study on Interpretations and Receptions of Plato's Theory of Justice).

5. Yoshihiro OSHIBA, 'Freedom in Horace's *Epodes*: poetic release from evil spells,' "Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition" 6-7 August 2012, Seminar Room (1F), Classics Centre, 66 St. Giles, Oxford OX1 3LU, England. (Jointly sponsored by Corpus Christi College Centre for the Study of Greek and Roman Antiquity and JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research Project: Comprehensive Study on Interpretations and Receptions of Plato's Theory of Justice).

6. 日向太郎「Ovidius, *Metamorphoses* 14.152-153 についての一考察」古典文献学研究会(フィロロギカ)第10回研究会、平成23(2011)年10月15日、東京大学駒場キャンパス

7. 大芝芳弘「Horatius, *Epod. 11*」古典文献学研究会(フィロロギカ)第10回研究会、平成23(2011)年10月15日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕(計4件)

1. 宮下志朗、井口篤、中務哲郎、村松真理子、日向太郎著、『ヨーロッパ文学の読み方—古典篇』、放送大学教育振興会、2014、80-118, 300-304.
2. 川島重成・茅野友子・古澤ゆう子編、佐野好則他著、『パストラル 牧歌の源流と展開』、ピナケス出版、2013、Pp. 287. (佐野担当部分: 211-30)
3. ロナルド・サイム著、逸身喜一郎、小池登、他訳『ローマ革命: 共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制』岩波書店、2013、Pp. xxxvii+819+72.
4. 慶應義塾大学編、大芝芳弘他著『文明のサイエンス 人文・社会科学と古典的教養』慶應義塾大学出版会、東京、2011.7. Pp.vi+336. (大芝担当部分: pp. 95-124)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

大芝 芳弘 (OSHIBA, Yoshihiro)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：70185247

(2)研究分担者

小池 登 (KOIKE, Noboru)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：10507809

(3)連携研究者

佐野 好則 (SANO, Yoshinori)
国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号：50295458

日向 太郎 (HYUGA, Taro)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：40572904